

(3) 結婚の理由・動機(Q1)

① 結婚の理由・動機の全体的傾向

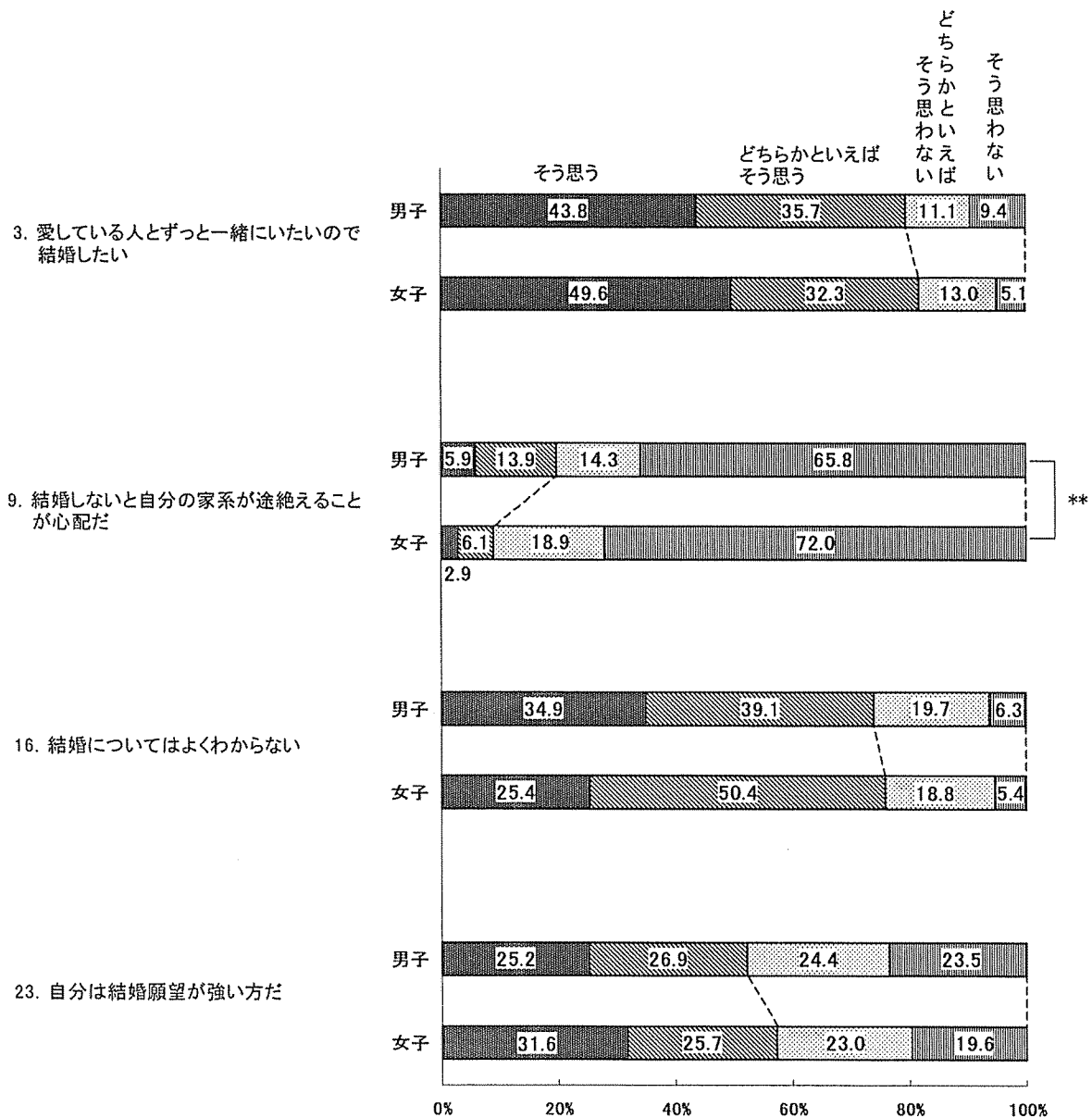
8割強の学生が、「愛している人とずっと一緒にいたいので、結婚したい」と回答し、9割以上の学生が、「結婚しないと、自分の家系が途絶えることが心配」に反対している。その一方で、「結婚については、よくわからない」と7割強の学生が回答している。

以上のように、大学生にとっては、結婚が目前に迫った出来事ではないため、結婚する理由や動機についてはまだ明確な考えを持っていなかった。

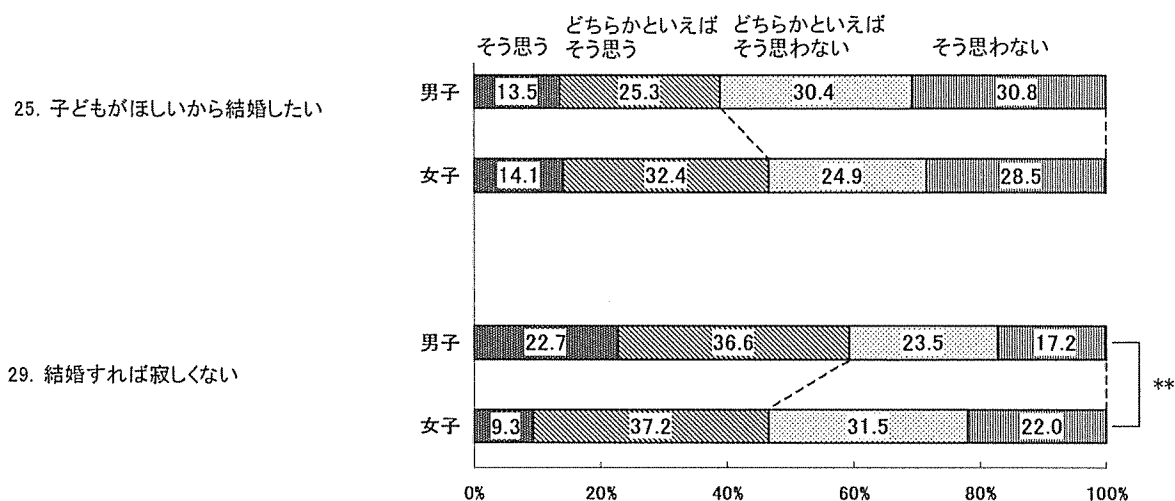
② 結婚の理由・動機における性差

男女別に見た結婚の理由・動機の回答結果を図表 2.10 に示す。

図表 2.10a 男女別に見た結婚の理由・動機(Q1)



図表 2.10b 男女別に見た結婚の理由・動機(Q1)(続き)



図表 2.10 にみられるように、男子は女子に比べると、結婚すると「寂しくない」と感じていた。また、女子は男子にくらべると、「結婚しないと、自分の家系が途絶えることが心配」とは考えておらず、男子の方が結婚に関して、家の存続を意識していた。

2. 結婚に対する意識の構造

(1) 因子分析による結婚に対する意識の構造の検討

結婚に対する意識の構造を明らかにするために、結婚に対する意識・結婚で得るものと失うもの・結婚の理由と動機のすべてを合わせた全項目に対して、因子分析（主成分解、バリマックス回転）を行った。それぞれの質問項目に対する回答は、「そう思う」を4点、「どちらかといえばそう思う」を3点、「どちらかといえばそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点と得点化された。

固有値1以上の因子についてバリマックス回転を行った結果、3因子が抽出された。各因子の寄与率(回転後)は、第1因子から順に、12.6%、8.5%、8.4%であり、累積寄与率は、29.5%であった。因子分析の結果を図表 2.11 に示す。

第1因子は、結婚すると「好きな人と一緒にいられる」、「安らぎを得られる」、「幸せになれる」などを示す項目から成り立つので、『結婚への期待』と命名した。第2因子は、結婚すると「自由にお金が使えない」、「家事や育児をしなければならない」、「自分の時間が少なくなる」など、結婚生活に対する閉塞感を示す項目から成り立つので、『結婚生活に対する拘束感』と命名した。第3因子は、「結婚後は、夫は仕事、妻は家庭」という考えや、「結婚して当たり前」、「女性の幸せは結婚にすることにある」という結婚に対する保守的な意見が示されたので、『伝統的結婚観』と命名した。

図表 2.11 結婚に対する意識の因子分析の結果

項目	因子 1	因子 2	因子 3	
結婚への期待				
Q1_3 愛している人とずっと一緒にいたいので、結婚したい	.67	-.08	.08	
Q1_27 結婚すると、安らぎを得られる	.67	-.03	-.04	
Q1_34 結婚すれば、幸せになれる	.66	-.10	.15	
Q1_23 自分は、結婚願望が強い方だ	.60	-.03	.24	
Q1_29 結婚すれば、寂しくない	.60	.08	.15	
Q1_38 結婚すれば、家庭や子どもが持てる	.58	.31	-.05	
Q1_25 子どもがほしいから、結婚したい	.51	-.01	.20	
Q1_21 一度結婚したら、最後まで配偶者に添い遂げるべきだ	.40	.07	.30	
結婚生活に対する拘束感				
Q1_32 結婚すると、自由にお金が使えない	-.11	.63	.05	
Q1_31 結婚すると、家事や育児をしなければならない	.25	.56	-.04	
Q1_39 結婚すると、自分の時間が少なくなる	-.26	.54	.11	
Q1_7 結婚生活に、多少の我慢は必要だ	.17	.42	-.07	
Q1_4 結婚すると、交際範囲が狭くなる	-.15	.40	.28	
Q1_28 結婚すると、配偶者に対して経済的責任を負う	.05	.40	.12	
伝統的結婚観				
Q1_14 結婚後は、夫は外で働き妻は家庭を守るべきだ	.14	.11	.59	
Q1_11 男性は結婚しないと、一人前とはいえない	.10	.10	.54	
Q1_15 結婚するのは、当たり前のことと思う	.43	.04	.52	
Q1_19 女性にとっての幸せは、結婚することである	.45	-.05	.47	
Q1_2 生涯独身で過ごすというのは、好ましい生き方ではない	.39	.05	.47	
Q1_9 結婚しないと、自分の家系が途絶えることが心配だ	.00	.12	.47	
Q1_22 今の世の中、結婚しなくても生きていける	-.13	.23	-.47	
Q1_1 結婚したら、家庭のために自分の個性や生き方を半犠牲にするのは当然だ	.04	.25	.41	
Q1_5 愛さえあれば、結婚できる	.38	-.13	.27	
Q1_37 結婚すれば、社会的信用が得られる	.17	.37	.24	
Q1_33 結婚すると、離婚というリスクを背負う	-.18	.37	.21	
Q1_36 結婚すれば、親が安心する	.30	.36	.04	
Q1_13 お金がなければ結婚生活は、うまくいかない	-.07	.32	-.04	
Q1_20 結婚すると、配偶者の家族と付き合いなくてはならない	.32	.38	-.07	
Q1_10 問題のある結婚生活なら、早く解消した方がよい	-.08	.23	-.10	
Q1_18 結婚する前には、相手の経済力を考える必要がある	-.03	.31	-.15	
Q1_16 結婚については、よくわからない	-.21	.22	-.17	
Q1_6 結婚しても、配偶者とは別に自分だけの人生の目標を持つべきである	.03	.23	-.35	
	因子負荷量の2乗和	4.05	2.71	2.68
	因子の寄与率(%)	12.64	8.46	8.37

(2) 結婚に対する意識の尺度構成

因子分析の結果から、結婚に対する意識は、『結婚への期待』、『結婚生活に対する拘束感』、『伝統的結婚観』の3側面から構成されていることが明らかになった。それぞれの側面について、 α 係数を算出したところ、『結婚への期待』から順に、 α 係数は、.77、.58、.70であった。各因子に高く負荷する(.40以上)項目の回答を単純加算し、各尺度得点とした。いずれの尺度も、尺度得点が高いほど、結婚に対して当該の意識が高いことを示す。

各尺度得点の分布範囲と平均と標準偏差を図表 2.12 に示す。

図表 2.12 結婚に対する意識の各尺度得点の平均と標準偏差

尺度名	N	分布範囲	平均	標準偏差
結婚への期待	637	8~32	22.01	4.73
結婚生活に対する拘束感	643	6~24	18.60	2.69
伝統的結婚観	639	8~28	14.56	4.07

(3) 下位側面別に見た性差

各尺度得点の性差を検討するために、平均値の差の検定を行った。その結果を図表 2.13 に示す。『結婚への期待』尺度では、有意な性差が認められなかったが、『結婚生活に対する

る拘束感』と『伝統的結婚観』では、男子の方が女性よりも尺度得点が高かった。

男子は女子よりも結婚生活に対して拘束感が強く、結婚に対して保守的な考えである伝統的結婚観も強いことが明らかになった。

図表 2.13 結婚に対する意識の各尺度得点における性差

尺度名		N	平均	標準偏差	t検定
結婚への期待	男子	234	22.44	(4.81)	ns
	女子	402	21.77	(4.68)	
結婚生活に対する拘束感	男子	238	19.44	(2.66)	***
	女子	404	18.12	(2.59)	
伝統的結婚観	男子	235	15.36	(4.22)	***
	女子	403	14.09	(3.91)	

注:***p<.001

第3節 離婚と離婚家庭に対する偏見意識と結婚に対する意識との関連

結婚に対する意識のどのような側面が、離婚および離婚家庭に対する偏見意識と関連しているのかを検討するために、男女別に相関係数を算出した。男性の相関図を図表 2.14 に、女性の相関図を図表 2.15 にそれぞれ示す。

図表 2.14 離婚と離婚家庭に対する偏見意識と結婚に対する意識との相関(男子)

	伝統的結婚観	結婚への期待	結婚生活に 対する拘束感
離婚家庭の子どもへの否定的イメージ	.28 *** (235)	.14 * (234)	.12 (235)
離婚する親への否定的イメージ	.29 *** (230)	.33 *** (229)	.15 * (233)
離婚に対する否定的評価	.49 *** (229)	.29 *** (228)	.03 (232)
離婚による人間的成長	.09 (233)	.25 *** (232)	.13 * (236)
女性の経済的自立による離婚の増加	.18 ** (234)	.11 (233)	.08 (237)

注:()内はNを表す。***p<.001、**p<.01、*p<.05

図表 2.15 離婚と離婚家庭に対する偏見意識と結婚に対する意識との相関(女子)

	伝統的結婚観	結婚への期待	結婚生活に 対する拘束感
離婚家庭の子どもへの否定的イメージ	.29 *** (401)	.19 *** (400)	.14 ** (402)
離婚する親への否定的イメージ	.31 *** (397)	.35 *** (397)	.12 * (399)
離婚に対する否定的評価	.38 *** (400)	.21 *** (399)	.15 ** (401)
離婚による人間的成長	.06 (403)	.19 *** (402)	.16 ** (404)
女性の経済的自立による離婚の増加	-.03 (402)	.04 (401)	.15 ** (403)

注:()内はNを表す。***p<.001、**p<.01、*p<.05

図表 2.14 と図表 2.15 より、男女ともに『伝統的結婚観』が、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』、『離婚する親への否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』の3つの尺度とそれぞれ正に相関していた。また、『結婚への期待』が、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』、『離婚する親への否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』、『離婚による人間的成長』の4つの尺度とそれぞれ正に相関していた。『結婚生活に対する拘束感』は、『離婚する親への否定的イメージ』と『離婚による人間的成長』の2つの尺度とそれぞれ正に相関していた。

男女での関連の仕方の違いを見ると、男子は『伝統的結婚観』が、『女性の経済的自立による離婚の増加』に正に相関していた。また、女子は『結婚生活に対する拘束感』が、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』、『女性の経済的自立による離婚の増加』の3つの尺度とそれぞれ正に相関していた。

以上の結果より、男女ともに、結婚するのは当たり前で生涯独身は好ましくないと考える伝統的結婚観であることや、結婚への期待や憧れが強い大学生は、自分の結婚に対する考えや価値観と大きく異なる離婚に対して、否定的な判断をする傾向が明らかになった。

つぎに、男女の違いについてみると、結婚に対して保守的で女性の幸せは結婚することにあると考える男子にとって、離婚は受入れがたいことであり、離婚増加の背景として、女性が経済力をつけて自立したことを強く感じていた。また、結婚生活に対して拘束感の強い女子は、結婚には個人の犠牲が必要と感じ、結婚に対して好ましいイメージを持っていないと同時に、離婚に対しても否定的意識が高かった。しかしその一方で、離婚増加の背景として女性の経済的自立を感じ、離婚による人間的成長を認識していた。

第Ⅱ部 離婚と結婚に対する意識調査(学生調査) 要約

【離婚に対する考え】

1. 大学生は男女ともに、離婚に対して許容的であり、否定的な意識は少ない。そして、離婚による人間的成長や人生の再出発としての意味を感じており、離婚のプラスの側面も認識していた。しかし、離婚すると苦勞するので、自分自身は避けたいと思っていた。つまり、離婚に対して否定的な意識や偏見は少ないが、自分としては回避したいと考えていた。
2. 男子は女子に比べると、離婚に対する抵抗感、嫌悪感が強く、離婚は避けたいし、離婚が周囲に知られると世間体が悪いと考えていた。一方、女子は男子に比べると、離婚に対して寛容で、状況によってはやむをえないと認識しているが、離婚すると女性の方が男性よりも苦勞すると強く感じている。

【離婚する原因に対する考え】

1. 大多数の学生が、「離婚する人は、子どもへの愛情が少ない人である」という意見には反対していたが、その他の意見「安易な気持ちで結婚する人が、離婚する」、「性格的に問題がある人が、離婚する」などについては、賛成と反対が概ね半々となった。このように大学生は、離婚の原因については明確な考えを持っていなかった。
2. 男子は女子に比べると、離婚する人には、親として自覚の欠如と本人の性格的な問題があり、それが原因で離婚すると強く感じていた。